

取り残された 心の叫び聞いて



3

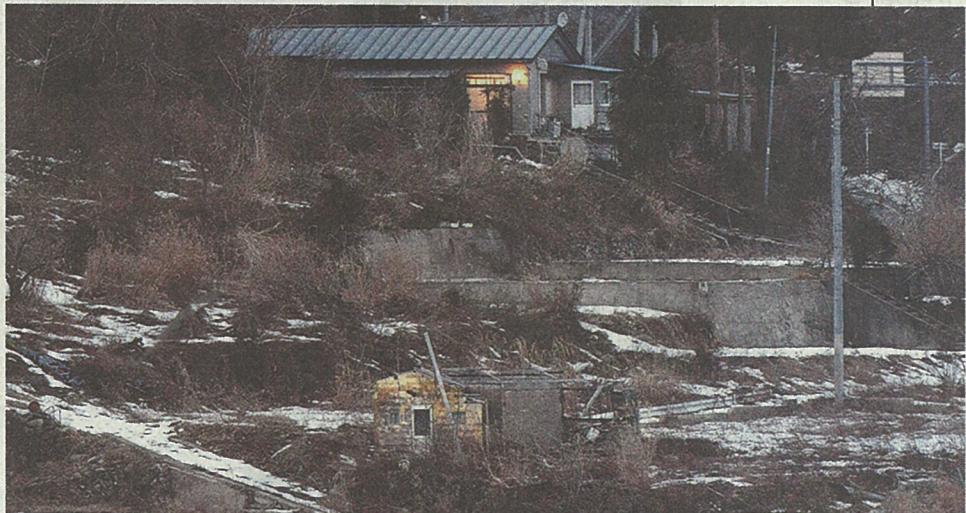
寄り添う

「行政の相談窓口は、気休めにすぎない。解決策を見つけるまで寄り添ってはくれない。心の叫びを聞く場所がないんです」。被災者の心の支え方を模索する東日本大震災圏域創生NPOセンター事務局長の太田美智子さん(62)は言う。

その言葉をかみしめながら、一月半ばかり精神科医の原敬造さん(65)とともに宮城県石巻市雄勝地区に向かった。原さんが代表を務める「震災こころのケア・ネットワークみやぎ」は石巻を拠点に、被災者を訪ねて話を聞く活動を続けている。

雄勝地区は津波で八割の家が全壊、住民の多くが地区外の仮設住宅などで暮らす。高台にあり難を逃れた自宅に一人で暮らす女性(65)は、「周りにだれもいないんだもんね、助けてっていつも。怖かった」と一週間前の暴風雪の時に感じた不安を訴えた。原さんは、「そうだね」とうなずきながら、ゆったりこたつに入つた。十五軒の集落で助け合つて暮らしていたが、他の家

十五軒の集落で助け合つて暮らしていたが、他の家



▲ 薄暮の中、一軒だけ明かりがともる家。いざも
り宮城県石巻市雄勝町で

震災後、親族の家など六度の転居を経て今の仮設に入った。三世帯が同居している自宅では、庭で体を動かしていたが、仮設に入つて閉じこもりがちになつた。

「前は食事のメニューを考え買い物を頼んでくれた

はみんな取り壊され、今ここでは暮らすのは自分だけ。不安感が強く、一時間おきに

自分が覚め、薬を飲んで眠

る。道一本隔てた土地は復

興住宅の建設予定地だ。

「でも、まだ木一本、切れてい。こんなに時間がたつちゃたら、みんな戻つて来るのかどうか」。東京か

仮設住宅を訪れ、笑い話を挟みながり悩み事などを聞く原敬造さん

けれど、今はもう関心もない。投げやりになるよ」とつぶやいた。

「私は夢も希望もない。族中が気持ちの疲れをためこんでいるように見えた。ついでいるように見えた。

仮設暮らしの人、自宅に

とどまる人、自宅を再建す

る人、復興住宅に入る人…。

「震災直後はみんな同じだった状況にこれからは差が出てくる。取り残されたと感じる人はますますつらくなる」と原さんは言う。

仙台で開業する原さん

は、三十代の七年間、石巻の病院に勤務した。被災で科医の応援も得て訪問を続け、必要な場合は専門機関につなぐ。

ネットは今、五百軒の人たちを見守る。全国の精神科医の応援も得て訪問を続

いていくんじゃないかな」。長いくんじやないか

雄勝からの帰り多くの子どもや先生が犠牲となつた大川小学校に立ち寄つた。

一人一人の名が刻まれた碑を前に、原さんの言う喪失感の大きさが迫つてきた。

この日、一緒に回つた精神保健福祉士の能戸奈央子さん(33)が、私の隣で手を合わせた。青森県むつ市出身で「被災地の役に立ちたい」との思いでネットに加わつたとい。被災地では高齢化が進む一方で、能戸さんのような若い人が新たに入ってきている。そこに

希望を感じた。(小林由比)